

養護教諭とスクールカウンセラーの より良い連携の在り方に関する研究

A Study of Improved Cooperation between Yogo Teachers and School Counselors

水 野 裕 子

中 村 俊 哉

Yuko MIZUNO
(長崎市立飽浦小学校)

Shunya NAKAMURA
(福岡教育大学)

(平成27年9月30日受理)

本研究においては、養護教諭とスクールカウンセラー（以下、SC）の意識や感情、行動に着目し、養護教諭とSCのより良い連携の在り方についての検討を行った。養護教諭6名、SC5名の計11名に半構造化面接のご協力を頂いた。面接では、現在及び過去の勤務校における経験について語って頂いた。そこで得られた語りはM-GTAを用いて分析した。結果、46の概念と6のカテゴリー、12のサブカテゴリーが生成された。SCが学校現場で十分に機能を発揮するためには、校内連携における連絡調整やSCへ援助対象者を繋ぐ役割を担う「コーディネーターの機能」が重要であることが見出された。また、「コーディネーターが養護教諭」である場合、養護教諭とSCの類似性による心的近さがあることや、養護教諭の職務の特質や保健室の機能を活かすことにより「コーディネーターが養護教諭以外の教職員である場合」よりも、SCとの連携をより良く行い、SCが専門性をより発揮しやすくなる可能性が考察された。

キーワード：連携, コーディネーター, 養護教諭, スクールカウンセラー, M-GTA

問題と目的

問題の背景

近年、いじめの深刻化や不登校児童生徒の増加など、児童生徒の心の在り様と関わる様々な問題が生じている。問題の複雑化・深刻化に伴い、学校現場では教師一人の力で問題解決を行うことが困難となっており、連携が求められている。しかし、現実的には、子どもの援助は担任教師などの個人の力量に負うところが多く、子どもの援助ニーズに十分に答えきれていないのではないかと（家近・石隈, 2007）という意見もある。

そこで文部科学省は、児童生徒や保護者の抱える悩みを受け止め、学校におけるカウンセリング機能の充実を図るため、平成7年度から「心の専門家」として臨床心理士などをSCとして全国に配置しその活用の在り方について実践研究を実施

してきた。

本研究において、連携とは、「学校だけでは対応しきれない児童生徒の問題行動に対して、関係者や関係機関と協力し合い、問題解決のために相互支援をすること（文部科学省, 2010）とする。

スクールカウンセラーに関する課題について

文部科学省によると、SCの配置の拡大に伴い、資質や経験に違いが見られる、学校における活用の仕方に大きな差が見られるなどの課題が指摘されている。SCの活用の仕方は、学校の教員や校内組織のあり方、校長を始めとした教職員の意識の差などにより、また、学校及び都道府県等によって大きな差がある。また、SCの1校当たり勤務時間数が週4～8時間程度に限定されていること、児童生徒の問題の状況に応じた柔軟な対応がしにくいことは、学校における相談体制の充実

という観点から大きな課題と考えられる。各学校において児童生徒や保護者がSCに一層相談しやすい体制作りが求められている。

養護教諭の役割について

平成20年1月の中央教育審議会答申においては、子どもの現代的な健康課題の対応に当たり、学級担任等、学校医、学校歯科医、学校薬剤師、スクールカウンセラーなど学校内における連携、また医療関係者や福祉関係者など地域の関係機関との連携を推進することが必要となっている中、養護教諭はコーディネーターの役割を担う必要があることが新しく明記された。熊谷（2000）によると、コーディネーターとしての養護教諭は「教職員に対して協力要請、ヒューマンネットワーク、チームづくり、リファーマの方法・技法を用いてその役割を果たしている」。このような役割を養護教諭が十分に果たせるよう、各学校で連携・協力体制を見直す必要があると考える。

本研究においては、SCとの校内連携における連絡調整や援助対象者を繋ぐ役割を担う者をコーディネーターと定義する。

養護教諭とSCの連携に着目する意義

養護教諭の特徴として相談活動の専門知識を有すること、保健室の機能を活用できること、学級担任と比較し職務時間の調整しやすいこと等があげられる。また、『子どもの心身の状態把握』では、他の校内分掌担当者と比較し、養護教諭が中心的役割を担っている（伊藤，2003）ことや、「学校における組織的な活用として、養護教諭は児童生徒の変調のサインを把握しやすい立場にあることから、SCと養護教諭の日常的な連携・協力体制について考える必要がある（文部科学省，2007）」ということが言われている。

これらのことから、学校にSCが配置されるだけではなく、養護教諭が職務の特質を活かし、相談活動の専門家であるSCと互いに工夫した連携を行うことにより、相談活動においてより良い連携ができるのではないだろうか。また、養護教諭とスクールカウンセラーの連携がスムーズになると、学校内の連携やチーム支援が円滑になるのではないだろうか（朝日・小坂，2011）という意見がある一方で、養護教諭とスクールカウンセラーの役割が類似しているゆえに、情報交換や役割分担などがうまくいかないと相互に混乱することもしばしば起こってくる（朝日・小坂，2012）。という現状もある。しかし、具体的な2者の類似点

は明らかになっておらず、現時点で、養護教諭とSCの連携に関する研究、養護教諭の視点を扱った研究は少ない。

目的

本研究では、養護教諭がコーディネーターとなる可能性を考慮しつつ、養護教諭とスクールカウンセラーが連携するプロセスにおいて、どのような要因があると連携がより良く進むのかを明らかにすること。また、連携する過程における連携意識や感情、行動の変化に注目しながらより良い連携の在り方を検討することを目的とする。

方 法

1. 調査協力者：H県内の学校に勤務する養護教諭6名、スクールカウンセラー5名。6校の学校の養護教諭とスクールカウンセラーに調査協力頂いた。
2. 調査時期：2014年5月中旬から11月下旬
3. 調査手続き：電話によりインタビュー協力を依頼。養護教諭とスクールカウンセラーの連携の在り方に関する質問項目に沿って語っていただくこと、インタビュー時間は50分程度であることを伝えた。また、依頼文書をお渡しし、個人情報の取扱いについての同意を得た上でインタビューを行なった。11名の協力者に、それぞれの質問内容（Table1, 2）について自由に語って頂いた。

Table1 インタビューガイド（SC用）

1. 養護教諭との連携についてどのような気持ちや考えを持っていらっしゃるか、またその内容
2. 養護教諭とSCの連携において問題点だと感じることがあるか、またその内容
3. 養護教諭とSCの連携においてどう連携したら上手くいったか（過程）
4. 養護教諭とSCが連携することの利点
5. 今後の養護教諭とSCの連携の在り方について養護教諭とSCの連携をより円滑にするためにはどうしたらよいか

Table2 インタビューガイド（養護教諭用）

1. SCとの連携についてどのような気持ちや考えを持っていらっしゃるか、またその内容
2. 養護教諭・SCとの連携において問題点だと感じることがあるか、またその内容
3. 養護教諭・SCとの連携においてどう連携したら上手くいったか（過程）
4. 養護教諭とSCが連携することの利点
5. 今後の養護教諭とSCの連携の在り方について養護教諭とSCの連携をより円滑にするためにはどうしたらよいか

許可が得られた場合のみ、録音をさせて頂いた。インタビュー時間は、1回あたり42分から2時間であった。

4. 分析方法：インタビューの逐語記録を起こし、分析対象とした。データは、一人あたり3,505～16,589字で、計118,594字であった。データ分析方法は木下（2003）が考案した、修正版グラウンデッドセオリーアプローチ M-GTA を採用した。

5. 分析手順：(1) 逐語記録を起こし、研究テーマに関連があると思われる部分に着目し、それを1つの具体例として概念生成を行い、ワークシートを作成した。

(2) データを読み込んでいき、新たな概念を生成し、それぞれに新しいワークシートを作成する。

(3) (2) と同様に、自分が生成しつつある概念に対する他の具体例を見つけ、ワークシートに追加していく。

(4) 概念生成で出てきた、疑問やアイデアを理論

的メモ欄に記入する。また、具体例だけでなく、対極例についても読み込んでいく。

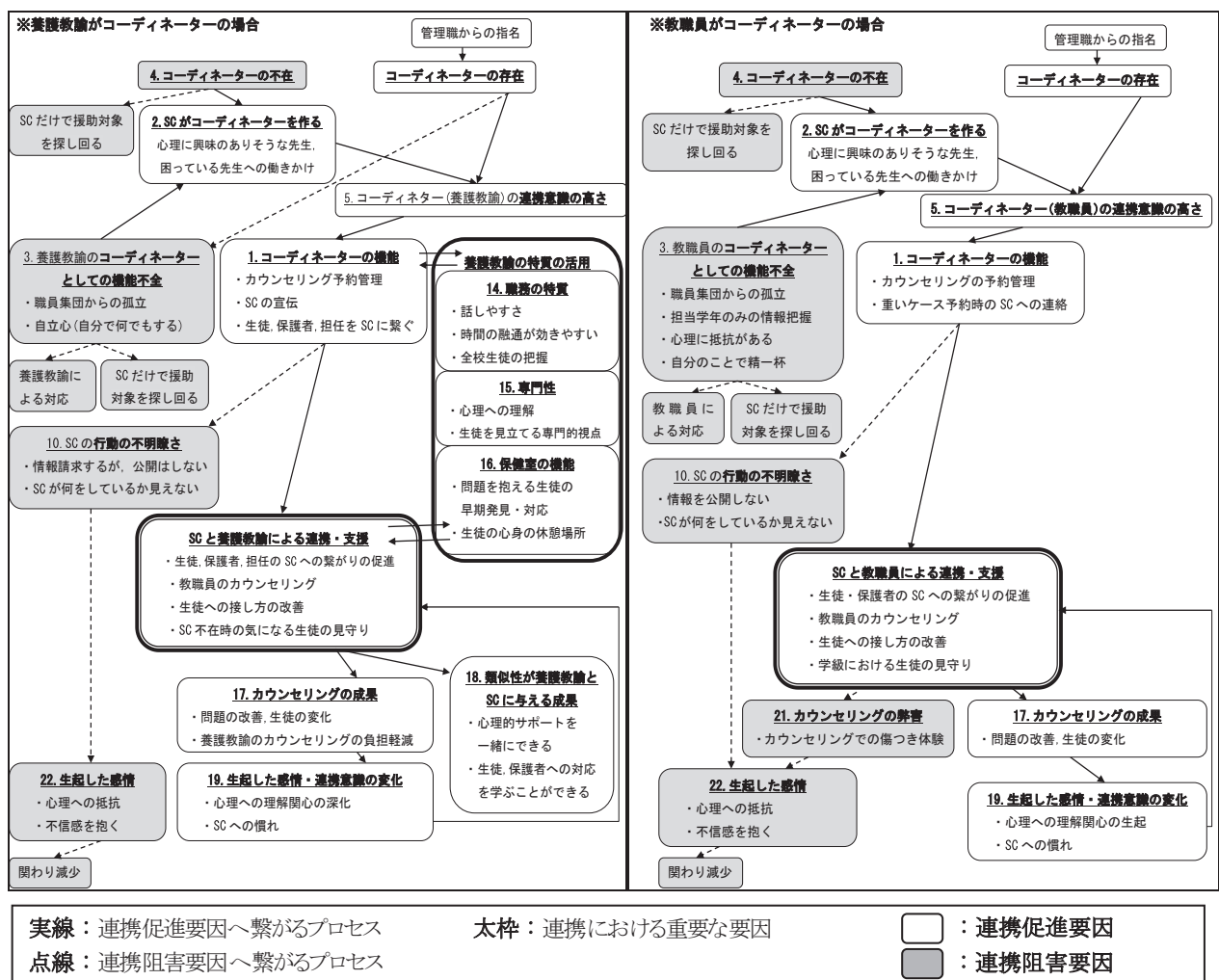
(5) 生成した概念をカテゴリー毎に整理し表に纏める。

(6) 生成した概念間の関係を図で表し、結果図を作成する。また、カテゴリーと概念を使用し、結果を簡潔に述べる（ストーリーライン）。

また、概念の生成や結果図の作成にあたり、調査者の主観に偏ることのないように大学教員・インタビュー調査を行なっていないSC、大学院生との検討を行った。

結果と考察

分析の結果、46の概念と6のカテゴリー、12のサブカテゴリーが抽出された。以下、結果図と各カテゴリーとそれを構成する概念、ストーリーラインについて説明する。



図中の番号はTable3のサブカテゴリーの番号と対応

Figure1 SC との連携・支援に繋がるためのプロセスについてのカテゴリー関連図

Table3 連携に影響する要因と連携による変化に関する要因についてのカテゴリー一覧

Ⅰ．連携促進要因

カテゴリー	サブカテゴリー	養護教諭以外の教職員	養護教諭	スクールカウンセラー
1) コーディネーターの機能	(1) コーディネーターの機能	・カウンセリングの予約管理 ・重いケース予約時の SC への連絡	・カウンセリングの予約管理 ・SC の宣伝 ・生徒、保護者、担任を SC に繋ぐ	
	(2) コーディネーター作り			・心理に興味を示す先生や困っている先生への働きかけ
2) 連携意識・行動	(5) 連携意識の高さ・行動	・連携相手への声かけ	・連携相手への声かけ ・連携相手への理解・配慮 ・SC 不在時の生徒の見守り ・SC の活動場所整備	・連携相手への声かけ ・連携相手への理解・配慮 ・生徒への関わり（保健室、教室へ行く） ・連携相手のニーズに合わせた対応 ・新しい取組の提案
	(6) 類似性		・類似性（一人職、受容）による心的近さ	・類似性（一人職、受容）による心的近さ
	(7) パーソナリティ	・話し易い雰囲気	・話し易い雰囲気	・話し易い雰囲気
	(8) 情報共有	・ツールの活用（内線、メール） ・校内委員会への参加	・ツールの活用（交換日記、メール等） ・校内委員会への参加	・ツールの活用（交換日記、メール等） ・校内委員会への参加 ・専門的視点やアドバイスを伝える
3) 環境・状況	(11) 物理的距離		・保健室と相談室、職員室が近い	・相談室と保健室、職員室が近い ・職員室に席がある
4) 特質・専門性	(13) 職務の特質		・話しやすさ（雰囲気、評価をしない） ・時間的融通の効きやすさ ・全校生徒の把握	・話しやすさ（雰囲気、評価をしない）
	(14) 専門性		・心理への理解 ・生徒を見立てる専門的視点	・見立て、カウンセリング ・高度な専門知識
	(15) 保健室の機能		・問題を抱える生徒の早期発見・対応 ・生徒の心身の休憩場所	・問題を抱える生徒の早期発見・対応 ・生徒の心身の休憩場所

Ⅱ．連携阻害要因

カテゴリー	サブカテゴリー	養護教諭以外の教職員	養護教諭	スクールカウンセラー
1) コーディネーターの機能	(3) コーディネーターの機能不全	・職員集団で孤立している ・自分のことで精いっぱい ・心理に興味無し / 抵抗有り ・担当学年の情報のみの把握	・職員集団で孤立している ・自立心（何でも自分でする）	・距離を置く
	(4) コーディネーターの不在			・援助対象を探し回る
2) 連携意識・行動	(9) 連携意識の低さ	・心理への理解不足・抵抗 ・SC への理解・配慮不足		・自ら行動しない ・学校の実情把握不足
	(10) 行動の不明瞭さ			・情報を請求するが公開しない ・行動が職員に見えない
3) 環境・状況	(11) 物理的距離		・保健室と相談室、職員室が遠い	・相談室と保健室、職員室が遠い ・職員室に席がない
	(12) 時間的制限	・授業の多忙さ	・業務の多忙さ	・勤務日、勤務時間の少なさ ・教職員が忙しそうで話しぶらい

Ⅲ．帰結／状況

カテゴリー	サブカテゴリー	養護教諭以外の教職員	養護教諭	スクールカウンセラー
5) 連携の成果	(17) カウンセリングの成果	・問題の改善、生徒の変化	・問題の改善、生徒の変化 ・カウンセリングの負担軽減	・問題の改善、生徒の変化
	(18) 類似性が与える成果		・心理的サポートを一緒にできる ・生徒、保護者への対応を学べる	・心理的サポートを一緒にできる ・生徒への対応を学べる
	(19) 生じた感情・連携意識の変化	・心理への理解・関心の生起 ・SC への慣れ	・心理への理解・関心の深化	・教職員に働きかけやすくなる
	(20) 相手に応じた行動	・SC に生徒や保護者を繋ぐ ・SC への相談	・SC に生徒や保護者を繋ぐ	
6) 連携の弊害	(21) カウンセリングの弊害	・カウンセリングでの傷付体験		
	(22) 生じた感情	・心理への抵抗	・不信感を抱く	
	(23) 相手に応じた行動	・距離を置く	・距離を置く	

本研究では、養護教諭と養護教諭以外の教職員を区別するため、養護教諭を「養護教諭」、管理職や担任教員を含む教職員を「教職員」と表現する。

1. カテゴリーと概念一覧：Table3 参照
2. 結果図：Figure1 参照
3. 各カテゴリーと概念 ※重要なものを抜粋

各カテゴリーとそれを構成する概念について説明する。

カテゴリーとサブカテゴリーの関連は、表1に示す。カテゴリー、サブカテゴリーの番号はTable3と対応している。カテゴリー名は《 》，サブカテゴリー名は< >，概念名は『 』，定義は【 』，調査協力者の発言は「 』，養護教諭の発言を（養），SCの発言を（SC）で示す。

なお、本研究では、発言の中で「（SCの）窓口」「キーパーソン」「係」と表現されている場合も、SCとの校内連携における連絡調整や援助対象者を繋ぐ役割を担う者を指すと判断した場合、「コーディネーター」と表現する。

I. 連携促進要因

1) カテゴリー1《コーディネーターの機能》

(1) サブカテゴリー1<コーディネーターの機能>

概念1『養護教諭がコーディネーターの場合の機能』の定義は【養護教諭がコーディネーターの場合、SCとの連携において主にカウンセリングの予約管理、SCの宣伝、気になる生徒や保護者、担任をSCに繋ぐ機能を果たす】こととした。「何とか君がこう言うから今度SCが木曜日に来るから話してみたらとか。私がいない間に、宣伝してくれている。（養）」養護教諭の場合、他の教職員とも情報を交換しつつ、SCの宣伝を行ったり、SCに繋ぐべき生徒を見極め、SCに繋いだりすることができるようだ。

概念2『教職員がコーディネーターの場合の機能』の定義は【教職員がコーディネーターの場合、SCとの連携において主にカウンセリングの予約管理、重いケース予約時のSCへの連絡を行う機能を果たす】こととした。「スケジュール管理は担当の先生がして下さって。で、色々な重たいケースだったりするとその先生が電話で私の方に連絡して下さい。SC」養護教諭の場合、

日常的にSCへ連絡しているため、重いケースのSCへの連絡を行うという概念が出なかったと考える。

(2) サブカテゴリー2<コーディネーター作り>
概念3『SCのコーディネーター作り』の定義は【コーディネーターが機能不全又は不在の場合、SCは自らコーディネーターを探す】とした。「カウンセリングに興味をもったり困ったりしている先生と、学年の困っている誰かと繋がろうと（SC）」SCから働きかけ、コーディネーターの役割を担う教職員を作ることが分かった。

2) カテゴリー2《連携意識・行動》

(5) サブカテゴリー5<連携意識の高さ>

概念4『連携相手への声かけ』の定義は、【連携相手へ声をかけ、コミュニケーションをとる】とした。「SCの先生にはお茶どうですかって自分から誘ってお話する（養）」業務以外の話題でも声をかけることで、相手に話しやすい印象を与え、連携にも繋がりがやすくなるようだ。

概念5『連携相手への理解・配慮』の定義は、【連携相手のことを理解しようとすることや、その理解を得た上で相手に配慮することで、連携を促進すること】とした。「（SCは）時間が本当に短いから、大変だと思う（略）顔も名前も分からない人がいっぱい、最初の頃はいるわけだし。ここら辺（養護教諭が、SCを学校に馴染みやすくすること）は、大事なと思いますけどね。（養）」相手を理解することで、相手への働きかけ方を変化させ、相手を尊重しつつ自分の活動の幅を広げることができるということが語られた。

概念7『養護教諭によるSC不在時の生徒の見守り』の定義は、【SCは非常勤の場合が多いため、SC不在時の気になる生徒の見守りを養護教諭が行う場合があるということ】とした。「1回カウンセリングしたからといって、また次の週なりのカウンセラーが来るまで暇があるわけだから。ある程度の情報をお渡ししておかないと。（SC）」養護教諭の<職務の特質>の『時間的融通の効きやすさ』があることで、生徒を見守り、SCにその時の情報を提供できる。また、SCからも、養護教諭に見守る生徒の情報を渡しておくことで、養護教諭がよりしっかりと見守りができるという概念である。

概念8『SCの生徒への関わり』の定義は、【SCが保健室や教室へ足を運び生徒と関わる機会を作る】こととした。「顔を売らないと、生徒はお前誰だっというような反応をするので。学校の

中を授業時間とか休み時間に巡回する (SC)」吉村 (2012) によると、教員よりも生徒との関わりが先に生じて、それについて話し合うことで教員との関わりが生じてくることもある。そのため、『SC の生徒との関わり』が連携を促進するといえるだろう。

概念 9『養護教諭による SC の活動場所整備』の定義は【養護教諭が SC の活動場所の整備や、SC の活動に必要な事務作業を行うこと】とした。「(SC の提案に対し養護教諭が) それいいじゃないっていう風に。でも私はずっとそこに勤めている訳じゃないからその細かい段取りは彼女が、私が居ないときにしてくれている。(SC)」養護教諭が SC の活動場所を確保・整備することで、SC が安心して職務に専念できるということによって生成したカテゴリーである。

概念 10『SC による新しい取り組みの提案』の定義は、【SC が今までにしていない新しい取り組みを提案する】とした。「アンケートを一つの媒介として、先生としゃべれることもあったかもしれない。(SC)」SC の提案に対し、学校側も協力的になることで、連携がスムーズに行き、取り組みの効果が得られることが伺えた。

(6) サブカテゴリー 6 <類似性>

概念 11『類似性 (一人職・受容) による心的近さ』の定義は、【養護教諭も SC も一人職であることや受容的であるという類似性があることにより、互いに心理的近さを感じている】とした。「学校という文化の中に入った時に一番私が安心して行けるのが保健室です (略) 何となくの心の近さみたいなものは当初から感じていました。(SC)」SC と養護教諭の類似性による近づきやすさが伺える。

(7) サブカテゴリー 7 <パーソナリティ>

概念 12『話しやすい雰囲気』の定義は【連携相手が話しやすい雰囲気であること】とした。「やっぱりコミュニケーションが行く人とが良いよね。そう思う。聞いてくれたりしたらね、また返せるし。(SC)」連携相手が話しやすい雰囲気のパーソナリティを持っていると連携が取りやすいという概念である。

(8) サブカテゴリー 8 <情報共有>

概念 15『SC が専門的視点やアドバイスを伝える』の定義は、【SC が教職員に専門的視点やアドバイスを伝える】こととした。「(フィードバックを) したら、お互い何を思っていたのかあの研修で。分かった部分もあったのかな (SC)」SC が研修や新しい取り組みを行うだけではなく、教職員へ

わかりやすくフィードバックを行うことにより教職員からの理解を得ることができるようだ。

3) カテゴリー 3 <環境・状況>

(11) サブカテゴリー <物理的距離>

概念 17『職員室に SC の席がある』の定義は、【職員室に、SC の席が用意されていること】とした。「ちゃんと椅子にラベルが貼ってあって、そこに来たらそこに座っていいという感じの。普通はそこ荷物置きになっているんですよ (略) まあいいやとも思うんですけど、やっぱり養護教諭がサッと来てすいませんすいませんと言ってどこかにもって行ったりとかして。(SC)」職員室に SC の席を確保することで、SC が安心感や居場所感を抱くことができるという概念である。

4) カテゴリー 4 <特質・専門性>

(13) サブカテゴリー <職務の特質>

概念 18『話しやすさ (雰囲気、外部性、評価をしない)』の定義は、【養護教諭と SC の職務の特質として生徒を評価しないことなどが挙げられ、それによる話しやすさを持っている】こととした。「先生が疲れんようにせなよとかいう一言があったり。教職員同士だとそういう声かけてなかなかしにくい。(養)」SC の外部性や専門性があることにより生徒だけでなく教職員も SC に話しやすさや、安心感を抱いているのではないか。

概念 19『時間的融通の効きやすさ』の定義は、【養護教諭は職務の特質上、時間の融通の効きやすさがある】ということとした。「保健室の先生に聞いているんです。保健室の先生が (生徒の情報を担任から) 掌握しているんで。(SC)」養護教諭の時間的融通の効きやすさがあることで、SC 不在時の気になる生徒の見守りや、SC と教職員、保護者との媒介機能を果たしていることが伺えた。

概念 20『全校生徒の把握』の定義は、【養護教諭の職務は全学年の生徒を対象としているため、全校生徒の情報を把握している】こととした。「養護教諭は全部に関わっているの。学年を超えた情報を持っているっていうことが、養護教諭が窓口になってくれた方が、SC はやりやすい (SC)」養護教諭は全学年を対象としているため、全校生徒の情報を把握しておりその情報を SC と共有できる。

(14) サブカテゴリー 14 <専門性>

概念 21『養護教諭による心理への理解』の定義は【養護教諭が専門知識として心理への理解をし

ている】こととした。「養護教諭は、少なくともカウンセリングの勉強を少しはされている訳ですから。理解は元々あるんですよ。だから1回1回説明しなくても分かってくれている感じはする(SC)」養護教諭の心理への理解があることによりSCが話の通じやすさや連携しやすさを感じている。

概念22『生徒を見立てる専門的視点、カウンセリング』の定義は、【SCは専門的視点を持って生徒の見立てやカウンセリングを行う。養護教諭も専門的視点を持って職務にあたっていること】とした。「養護教諭が生徒と関わる中で(略)SCに繋がった方が良い生徒を常に見極めて、実際にSCの先生に気になる子について、この子をお願いしますという風に繋げていく(養)」養護教諭は、専門的視点を持ちながら生徒と接することによりSCに繋ぐべきケースかどうかを見極めていく。一方、「(SCにより)教師のフォローをもらえるので聞けば色々答えが返ってくる(養)」というように、SCは教職員や生徒への専門的支援ができるという評価がある。

(15) サブカテゴリー15＜保健室の機能＞

概念23『問題を抱える生徒の早期発見・対応』の定義は、【保健室の機能として、問題を抱える生徒の早期発見・対応がある】こととした。「保健室は生徒さん達が集まりやすい場所であったり身体的なケガではなく精神的にきつかったりする生徒さんが来られると思うんで、そういった中でSCに繋がるケースというのが中にはあったりする(SC)」身体的な症状を訴えて保健室を利用する生徒の背景にある心理的な問題を早期発見しSCに繋ぐ役割を養護教諭が担っているといえる。Table4分析ワークシートの一例を参照。

概念24『生徒の心身の休憩場所』の定義は、【生徒が心身の休憩場所として利用する保健室の機能を活かす】とした。「生徒は相談室だと何を悩んでいるのって(略)周りがですね。保健室だと体調悪いけん行った。そこにたまたまSCの先生が話していただけたらいいに言える(SC)」相談室に抵抗がある生徒も、保健室であれば抵抗なく足を運べる。SCが保健室に来ることでカウンセリングに抵抗をもつ生徒と繋ぐことができることが分かった。

II. 連携阻害要因

1) カテゴリー1＜コーディネーターの機能＞

(3) サブカテゴリー3＜コーディネーターの機能不全＞

概念25『養護教諭がコーディネーターの場合の機能不全』の定義は【養護教諭がコーディネーターの場合の機能不全と、その際のSCの動き】とした。「養護教諭の先生が窓口になっていても上手く学校とつながれない場合も稀にあって。それは、学校の職員集団の中で養護の先生が関わっていない場合なんですよ。(SC)」養護教諭がコーディネーターの場合、職員集団で孤立している場合や、養護教諭が外部機関の紹介等、自分で何でもしようとしている場合に機能不全を起こしていた。

概念26『教職員がコーディネーターの場合の機能不全』の定義は、【教職員がコーディネーターの場合の機能不全と、その際のSCの動き】とした。「カウンセリングの必要性とかそういうことをあまり感じてこなかった先生達と私は今出会っている。だから私が、同じような提案をしても却下される(SC)」教職員がコーディネーターの場合、職員集団から孤立している場合と自分の事で精一杯の場合、心理に抵抗がある場合、担当学年の情報しか把握していない場合に機能不全を起こしていた。

概念27『SCが援助対象を探し回る(コーディネーターの不在の場合)』の定義は【コーディネーターの不在又は機能不全の場合、SCが援助対象を探し回る】とした。「キーパーソンの先生が不在っていうこともあるんですよ。その場合どの先生にアプローチすると一番いいかなって探して歩く(SC)」この場合、SCが業務に専念しづらく連携にも繋がりにくい状態といえるのではない。

2) カテゴリー2＜連携意識・行動＞

(9) サブカテゴリー9＜連携意識の低さ＞

概念28『教職員の心理への理解不足・抵抗、異文化への苦手意識』の定義は【教職員が心理を十分に理解しておらず重要視していない、心理に対して抵抗や苦手意識を感じている】とした。「カウンセリングは全てを受け入れるというイメージを持っておられて、生徒指導と反する立場だから受け入れに抵抗を示す先生もいます(養)」教職員が心理への抵抗をもっている場合、SCとの連携やSCの活動を阻害してしまう可能性もあると

考える。

(10) サブカテゴリー 10 <行動の不明瞭さ>

概念 32『SCの行動の不明瞭さ』の定義は【SCの行動が職員に見えない場合やSCが情報公開をしない場合の、SCの行動が不明瞭である】こととした。「情報だけを私に聴いて自分の中に入れて自分は全く出さないという人もいた。(略) 何だあの人はって。だから、私からはだんだん言わなくなった(情報が) どう使われているのかなって(養)」SCが養護教諭に自ら働きかけた場合でも、フィードバックをせずSCの行動やその意図が相手に伝わらない場合、不信感に繋がる。更に、不信感が生じたことで相手からの情報提供がなくなる等、連携阻害に繋がる可能性が示唆された。

3) カテゴリー 3 <環境・状況>

(12) サブカテゴリー 12 <時間的制限>

概念 35『授業の多忙さ、SCの勤務時間の少なさとそれによるSCの遠慮』の定義は、【教職員、養護教諭、SCとも業務の多忙さがある。SCは、勤務日数や勤務時間が短い場合が多いということ】である。「予約が私も結構立て込んでいます。養護の先生に伝えたいけど話したいけど、中々話せないということは、よくあります。(SC)」どの職種も業務の多忙さがあることにより、連携したい相手ともコミュニケーションができにくいといえる。教職員の多忙さのため、生徒の話聞くという役割をSCが補うという意味でも重要視されていることが分かった。

Ⅲ．帰結／状況

5) カテゴリー 5 <連携の成果>

(17) サブカテゴリー 17 <カウンセリングの成果>

概念 36『問題の改善、生徒の変化』の定義は【カウンセリングの成果として、問題の改善や生徒の変化を教職員が感じることがある】こととした。「実績っていうのは、生徒が見えることだと思うんですよ。生徒が変化して。それしかなかなか、先生たちの納得が得られないだろうから。(SC)」カウンセリングを受けた生徒が変化し、それを教職員が実感することで、教職員の納得が得られる可能性があることが分かった。

(18) サブカテゴリー 18 <類似性が与える成果>

概念 38『養護教諭とSCは、類似性があることで心理的サポートを一緒にできる』の定義は【養護教諭とSCは類似性があることで心理的サポート

を一緒に行うことができる】とした。「私の方が引き出してあげて、それをカウンセラーの先生に情報として提供してそういうのが出来る。両方の専門が活かされる(養)」養護教諭は心の面をみるという部分でSCとの近さを感じている。互いの専門を補い、協力し合う意識が伺えた。

概念 39『生徒や保護者への対応を学べる』の定義は【養護教諭とSCは類似性があることで、互いに生徒や保護者への対応を学ぶことができる】とした。「SCの先生に本当に色々教えてもらいました。子どものこととか学校のこととか。それによって安心を得る部分は大きかった(養)」養護教諭とSCは保護者や生徒支援をする部分で職務内容が近い。互いに専門的視点を学ぶことでより良い支援や安心感に繋がるのではないかと。

(19) サブカテゴリー 19 <生起した感情・連携意識の変化>

概念 40『心理への理解・関心の生起／深化』の定義は【連携の成果により、心理への理解・関心の生起や深化へ繋がる】とした。「(SCが提案した取り組みの) フィードバックとして、私が知り得た情報とか先生が持っている情報を(略) 学校守秘義務っていう立場で(略) 情報をやるっていうことはありますね。で、先生が関心を持ってくれるということはあったと思います。(SC)」連携、カウンセリングの成果として、教職員が問題改善や生徒の変化を感じ、心理の理解関心の生起へ繋がるのが伺えた。

(20) サブカテゴリー 20 <相手に応じた行動>

概念 42『SCに生徒や保護者を繋ぐ』の定義は【教職員がカウンセリングの成果を感じ、心理への理解・関心が生起／深化したことによりSCへ生徒や保護者を再び繋げようとする動きが生じる】こととした。「成功をするケースを見たら担任とかが、あーよくなっとるねとかって言って。で、次の学年くらいになった時に、同じ様な生徒がいたけれども、カウンセリングでよくなったからまた頼もうとかいうような次の動きになる(SC)」教職員がカウンセリングの成果を感じることで心理への関心が生じ、SCへ再び繋げようとする動きが生じるようだ。

概念 43『SCへの相談』の定義は【SCが教職員への働きかけとそのフィードバックを行うことで、教職員の心理への関心の生起、SCへの相談に繋がる】とした。「授業見に行って(略) 生徒がそんな風にしていましたって(伝える)。そしたら大抵先生はピンと来られたり。(略) 何とかしてあげたいって思っている先生は、やっぱ

次、どうしたらいいでしょうねって聞いてこれるし。(e氏)」SCが教職員への働きかけとそのフィードバックを行うことでSCへの相談に繋がることが示唆された。

6) カテゴリー6《連携の弊害》

(23) サブカテゴリー23<相手に応じた行動>

概念46『SCと距離を置く』の定義は、【心理への抵抗や相手への不信感が生じた結果、SCと距離を置くこと】とした。「情報だけを私に聴いて自分の中に入れて。で、もう自分は全く出さない(略)何だあの人っては。だから、だんだんもう言わなくなった。(伝えた情報が)どう使われているのかなって。だから(情報を伝えても)その子のためにもならないし。(養)」

4. ストーリーライン

(1) 養護教諭がコーディネーターの場合のSCとの連携プロセス (Figure1 参照)

養護教諭がコーディネーターに指名されておりSCとの<連携意識が高い>場合その機能を果たす。その際、養護教諭の《特質・専門性》を活用することで連携が促進され、SCと養護教諭による連携・支援に繋がる。

しかし、『養護教諭がコーディネーター』に指名されていても、養護教諭が何でも自分でしょうとする『自立心』を持っている場合や職員集団から孤立している場合は十分なコーディネーターの機能を果たせない『コーディネーターの機能不全』に陥る。その場合SCは、自分だけで援助対象を探し回るか、コーディネーターの役割を担ってくれそうな先生に働きかける<SCのコーディネーター作り>。『コーディネーターが不在』の場合も同様である。養護教諭がコーディネーターの機能を果たしているにも関わらず、SCと養護教諭による連携・支援に繋がらない場合がある。それは<SCの行動の不明瞭さ>がある時だ。『養護教諭がコーディネーター』としてSCに働きかけたとしても、SCからの情報提供がないなどSCの行動が養護教諭に見えない場合、養護教諭がSCに対する不信感を抱き、関わりが減少する。

一方、SCと養護教諭による連携・支援に繋がった場合『カウンセリングの成果』が表れ、それにより養護教諭の『心理への理解関心の深化』に繋がり、養護教諭が再びSCとの連携支援を求めることになる。また、養護教諭とSCには職務の類似性がある。そのため、互いに生徒や保護者

の対応を学び心理的サポートが一緒に出来るという『類似性が与える成果』に繋がる。

(2) 教職員(養護教諭以外)がコーディネーターの場合のSCとの連携プロセス (Figure1 参照)

教職員がコーディネーターに指名されており、SCとの<連携意識が高い>場合、その機能を果たす。

しかし、『教職員がコーディネーター』に指名されていても、教職員が『心理への抵抗』を持っている場合や職員集団から孤立している場合等に、『コーディネーターの機能不全』に陥る。その場合SCは、自分だけで援助対象を探し回るか、コーディネーターの役割を担ってくれそうな先生に働きかける<SCのコーディネーター作り>。『コーディネーター不在』の場合も同様である。

教職員がコーディネーターの機能を果たしているにも関わらず、<SCの行動の不明瞭さ>がある場合、SCと教職員による連携・支援に繋がらない。教職員がコーディネーターとしてSCに働きかけたとしても、SCからの情報提供がない場合やSCの行動が教職員に見えない場合、教職員がSCに対する不信感を抱き、関わりが減少する。一方、SCと教職員による連携・支援に繋がった場合、『カウンセリングの成果』が表れる。それにより教職員の『心理への理解関心の生起』に繋がり、教職員が再びSCとの連携支援をすることになる。しかし、『カウンセリングの弊害』が生じると、教職員が不信感や心理への抵抗を抱き、SCとの関わりが減少する。

総合考察

養護教諭がコーディネーターとなる利点

SCの多くは非常勤であるため、SC不在時に生徒を見守り気になる生徒をSCに繋ぐ等の役割を担うコーディネーターの存在が必要となる。コーディネーターは、ただ存在していれば十分という訳ではない。養護教諭がコーディネーターの場合、養護教諭の職務の特質、専門性、保健室の機能を活かすことで、SCとのより良い連携に繋がる可能性が示唆された。具体的に養護教諭は、職務の特質から常に全校生徒の把握を行い、養護教諭の活動の中心である保健室の機能を活かしながら保健室に集まる問題を抱える生徒の早期発見・対応を行う。その際、養護教諭は生徒を見立てる専門的視点を活かし、SCに繋ぐべき生徒を判断する。その判断に応じ、SCに生徒を繋ぐ。

SCに援助対象者を繋ぐまでのプロセスだけで

Table4 分析ワークシートの一例

ワークシート 23	
概念 23：問題を抱える生徒の早期発見・対応	
定義：保健室の機能として、問題を抱える生徒の早期発見・対応がある	
バリエーション（具体例）：	
養護教諭の意見	SC の意見
<p>*ちょっと D 先生（SC）に話を聴いてもらったほうが良いかなって思った子には、いきなり初対面の女性の人に話せないんですよね。実は・・・みたいなことは。急にはなんかこう、言えないので、なので、事前に先生とはこう、打ち合わせをしながら、で、先生来ている時に、『ちょっと保健室に来ているんですけど、ちょっと通りがかってくれませんか？』みたいなことを言ったりね。そういう打ち合わせを裏でして、『じゃあ私、後で行くね』って言って、で、ここで話をしているときに、ちょっとこう『あー、こんにちば』みたいに入ってきてもらったりとか。で、そこで顔見知りになって、で、ここで話したりして、じゃあ次、『こっちに来てみない？』みたいに話したりとか。そういうことも何度も、したりしていますね。（D 氏，3 頁）</p> <p>*（担任が生徒に）<u>用事を作って保健室に来させてくれたりとか話したりとか、作ってきてくれたりしたこともあるので。この子は SC に相談ではないなと言う子ももちろんいるし、そこまでじゃないなという判断も私（養護教諭）があるので。</u></p> <p><u>本人自身が嫌がると言うか、本人自身がそこまでじゃないと分かっている時もあるので。その時は、保健室までで話して終わりっていう子もいるしですね。（A 氏，8 頁）</u></p> <p>*子どもは、まず、保健室で話すことが多いので、話しにくるというよりは、来て、話をするなかで気付くという形が多いですけど。</p> <p>そこから、養護教諭が気付いて、担任や SC に繋げたり情報共有できたらいいと思います。（B 氏，3 頁）</p> <p>*最初っから悩みがあると言ってくる子はほとんどいないでしょ、でやっぱり、なんか具合が悪いとか、不定愁訴で来る子をこっちが引き出すというか、なんかあったやろって。まあ、なんかあったって分かるためには、日常の姿も見ておかないといけないんだけど。普段と違うところを察して、聴きだすっていうところじゃないかなと思いますね。</p> <p><u>保健室に何か助けを求めているっていうことを、こっち側がやっぱり気付かないと、な、いけないんじゃないかと思いつながら、なるべく頑張って、なんかあったんやないとか声をかけをしながら。（A 氏，6 頁）</u></p>	<p>*子どもが保健室に来るんですね。そしたら、合図が来て。あっ！みたいな。あー、あの子か、さっき話していたのは。っていうようなこともありますので。あー、そうか、この時間には来るんだ、やっぱり。で、そこでちょっと話してみるとか。で、保健の先生が、‘今度よかったら、カウンセリング受けてみたらどう？’って声かけてくれて。こんなおばさんなんだよみたいな。（e 氏，8 頁）</p> <p>*養護教諭というか、保健室っていうのは、生徒さん達が集まりやすい場所であったりとか、こう、普通にこう、身体的なケアではなく、精神的にきつかったりする生徒さんがこられると思うんで、やはりそういった中で SC につながるケースというのが、中にはあったりするし、そういう風な話を伺ったりも、他の SC の先生からも伺ったりすることもあるんで。やっぱりこう、何ていうかな、養護の先生の存在っていうのは、かなり大きいかなって思います。（b 氏，1 頁）</p> <p>* SC って、結局、不登校のお子さんとかが、結構多くお会いすることが多いですね。そうなると、やっぱり、不登校のお子さんって、学校にたまに、不登校傾向にある子って、学校にきて、やっぱり朝から夕方までずーっと教室に居るのはきつくなって。まあ、保健室に行くこと多いですね。で、あとはまあ、これから不登校になるかもしれないっていう生徒さんも、大体、その前に、保健室に行ってます。そういうこともあるので、必ず保健室の先生とは、最近保健室に来る回数が多くなった生徒さんはいませんか？っていうことで、話をすることは。やっぱり不登校にならない。ある程度なりそうな生徒を、ならないように防ぐために、も、とても大事だと、私は考えています。っていうことですね。（f 氏，1 頁）</p> <p>*保健室を利用するということは、やっぱりこう、身体的な外傷だけではなくて、こう精神的にもきついたりとか、いう場合に対応していただけるのは、やっぱり養護の先生かなと思うので。その養護の先生の一声一声っていうのは、子ども達にとって、とても大事になってくるものだなと思うし。やっぱりそこで、得た情報といいますが、こういう子が来ていますとか。特に SC と関わった方が良いついていう風に先生がこう、判断された子を繋げてくださるということの、ある意味パイプ役みたいなのところもありますので。そういったところでは、ありがたい存在という風に思っています。（b 氏，10 頁）</p> <p>*あの人どんな人なんですかね、授業中いっぱい寝ていたみたいなんですけどとか言ったら、「あーあの人、ずっと遅くまで家で寝てないし」とか、そういう情報も、もらえるという。（d 氏，5 頁）</p>
理論的メモ：	
<ul style="list-style-type: none"> ・生徒は、身体的な症状を訴えて保健室を利用する場合が多い。身体症状の背景に、心理的な問題が隠れていることがあるため、そのような隠れた問題の早期発見の役割を保健室で養護教諭が担っているといえるだろう。 また、そこで養護教諭が得た情報や、養護教諭の見立てを SC に伝え、SC が保健室を活用して生徒のカウンセリングに繋ぐことができる可能性が見出された。 ・養護教諭が気になる生徒を SC に繋ぐ際、事前に打ち合わせをして意図的に SC に繋ぐこともあることが分かった。保健室という場の機能を活かしつつ、SC や養護教諭の専門的視点や技術を発揮することで、生徒がカウンセリングに抵抗感を抱かずに SC に繋ぐことができるのではないかと。 ・相談室に行く前段階としての保健室の機能が見出された。いきなり相談室に行くのではなく、まず、生徒が慣れている保健室で SC と顔見知りとなり、必要に応じて相談室に繋ぐ役割があることが伺える。 	

はなく、継続支援の中でも養護教諭がコーディネーターの場合の方が支援のしやすさがあることが伺えた。具体的には、養護教諭の時間的融通があることにより、SC不在時の生徒の見守りや、担任や保護者から得た情報をすぐにSCへ伝えることができる。また、養護教諭が活動の中心とする保健室の活用も連携を促進する要因となることが分かった。カウンセリングに抵抗のある生徒の場合、急にSCのカウンセリングを勧めるのではなく、養護教諭とSCが事前打ち合わせした上で、SCが偶然を装って保健室へ訪問し、気になる生徒と顔馴染みになれる様にするという工夫もされていた。さらに、そこからSCが生徒と関係性を作り相談室へ繋ぐケースもあるが、周囲を気にして相談室へ行くことに抵抗を示す生徒もいる。その場合、保健室でSCが話を聴くというカウンセリングをすることもできることがわかった。保健室の機能を活かしつつ、SCや養護教諭の専門的視点や技術を発揮することで、生徒がカウンセリングに抵抗感を抱かずにSCに繋ぐことができるのではないかと。以上のように、養護教諭がコーディネーターとなり、SCと連携を行うことによって、より良い連携支援に繋がる可能性が見出された。

養護教諭とSCの類似性について

養護教諭とスクールカウンセラーの役割が類似しているゆえに、情報交換や役割分担などがうまくいかないと相互に混乱することもしばしば起こってくる（朝日・小坂、2012）という意見がある。しかし本研究では、類似性があることで混乱するという事実は見受けられなかった。むしろ、養護教諭とSCが連携する際、養護教諭に心理への理解があることや、養護教諭とSCの類似性による心的近さがあることにより、教職員よりも養護教諭の方が話しやすいと感じているSCもいるなど、類似性が連携を促進する要因として捉えられると考える。また、養護教諭とSCが連携する場合、教職員とSCの連携の際に見られたカウンセリングによる弊害がみられなかった。これは、養護教諭に心理への抵抗があるという状況が見受けられなかったこと、養護教諭の専門性として心理への理解が含まれていることが関係していると考えられる。さらに、養護教諭とSCの連携の成果として、養護教諭のカウンセリング負担の軽減、養護教諭とSCが互いに生徒や保護者への対応を学ぶことができること、心理的サポートを一緒にできるというような利点が伺えた。これらは、養護

教諭とSCの類似性があるため生じたことだと考える。

一方で、「外部機関の紹介であつたりとかは、SCの活動の大事な一部だとは思んですけど、（略）その部分をこれまでの経験からやってこられて、比較のご自分なりに見立てられて、医療機関が必要だなと思われたら、さくさくっと紹介して下さる先生もいらっしゃる」というSCの意見もあった。養護教諭の自立心があることで、SCとの連携には繋がりにくい状況だと言える。しかしこの場合、SCが「保健の先生とは、ちょっと距離を置きながらだったんですけど、反対に生徒指導の先生とよく話のできたので、そっちとか、特別支援の先生とお話をするとかっていう形で、気になったらぜひ繋げてくださいねとかというふうに動いていけた（SC）」というように柔軟な対応をとられていた。よって、先行研究の様に、養護教諭とSCの類似性が連携阻害要因となりうる現状もあるといえるだろう。しかし、相手に合わせた柔軟な対応をとることでSCがその機能を果たせることが分かった。

連携意識の高さについて

より良い連携を行うためには、連携意識を高く持ち行動することが重要であることが分かった。具体的には、SCの席を職員室に確保すること、SCの宣伝を行うこと等が挙げられる。これらを行うことにより、物理的にSCが機能しやすくなるだけでなく、SCが居場所や安心を確保し心理的距離を近づけることにもなることが分かった。SCは非常勤の場合が多いため、SC自身ができることは限られている。このことを意識し、特にコーディネーターが中心となって、連携しやすい環境づくりを行うことが求められるだろう。

SCの行動の不明瞭さについて

SCからの働きかけがあっても相手がSCの行動の不明瞭さを感じていれば、不信感や連携阻害に繋がる場合があることが分かった。SCから働きかけるだけではなく、相手がSCの行動の意図やSCが何を見ているのかを理解できるようにフィードバックを行うことで、相手からの理解を得やすくなることが示唆された。心理に抵抗のある教職員に対しても、SCから働きかけるとともに分かりやすくフィードバックすることにより、SCへ繋がる可能性があることがわかった。フィードバックにより教職員にとって不明瞭だったSCの行動やその意図、これから教職員がどうしたら

よいのかが分かることになる。結果、教職員が心理に興味関心を持ち、SCへ繋がる可能性が伺えた。しかし、「SCの何をどこまで知っておいてもらおうと活動上都合が良いかは、その勤務する学校やSCによって異なる（吉村，2010）。」という意見もあり、相手に応じどの様なフィードバックを行うかを考慮する必要があると考える。

本研究における留意点

本研究では、養護教諭とSCの連携、教職員とSCの連携という視点で連携の在り方を研究した。しかし、どちらの場合においても、その二者だけで問題が解決できる訳ではないことに留意したい。誰がコーディネーターとなった際にもSCだけと連携をする訳ではなく、保護者や学級担任、養護教諭等の関係者や関係機関等、場合に応じ適切な相手を考え連携していくことが重要だろう。

今後の課題

インタビュー調査より、SCの勤務形態や私立と公立の違いによってSCや養護教諭の役割が変わってくるということが見出された。しかし本研究では、これらの違いを考慮できていない。各学校における養護教諭とSCの役割の違いを考慮した上で、SCとの連携の在り方を検討することが本研究の課題である。

引用文献

- 新井 雅・庄司一子 (2014). 臨床心理士、教師、養護教諭によるアセスメントの特徴の比較に関する研究 心理臨床学研究 32, 2, 215-226
- 有村信子 (2003). 養護教諭複数配置やスクールカウンセラー導入が養護教諭の執務に与える影響—スクールカウンセラー等との連携の観点から— (Ⅱ) 鹿児島純真女子短期大学研究紀要 33, 19-29
- 秋光恵子・白木豊美 (2010). チーム援助に関するコーディネーション行動とその基盤となる能力・権限が養護教諭の職務満足感に及ぼす影響 教育心理学研究 58, 34-45
- 堀尾良弘 (2012). 学校におけるスクールカウンセラーの活用とその展望 人間発達学研究 3, 53-60
- 伊藤美奈子 (2003). 保健室登校の実態把握なら

びに養護教諭の悩みと意識 スクールカウンセラーとの協働に注目して— 教育心理学研究 51, 251-260

木下康仁 (2007). ライブ講義 M-GTA—実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて 弘文堂

熊谷すき子 (2000). 保健室と養護教諭の特質を生かした相談活動の在り方に関する研究—一人で抱え込まずより有効な支援を行うために— 佐賀県教育センター

文部科学省 (2009). 児童生徒の教育相談の充実について—生き生きとした子どもを育てる相談体制づくり— 教育相談等に関する調査研究協力者会議

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2010/01/12/1287754_1_2.pdf

笹嶋由美他 (2004). 北海道内中学校における養護教諭とスクールカウンセラーとの連携に関する実態調査 北海道教育大学紀要 55, 1

植山起佐子 (2008). 学校臨床におけるコラボレーションの実践 教育臨床心理学研究 8, 2, 204-210

吉村隆之 (2010). 教員がスクールカウンセラーへ相談するプロセス スクールカウンセリング活動の透明性 心理臨床学研究 28, 5, 573-584

吉村隆之 (2012). スクールカウンセラーが学校へ入るプロセス 心理臨床学研究 30, 536-547

吉澤佳代子・古橋啓介 (2009). 中学校におけるスクールカウンセラーの活動に対する教師の評価 福岡県立大学人間社会学部紀要 17, 2, 47-65

謝 辞

稿を終えるにあたり、早くインタビュー調査実施にご協力いただきました管理職の先生方、お忙しい中時間を割いてインタビューにご協力いただきました養護教諭の先生方、スクールカウンセラーの先生方に心より御礼申し上げます。また、終始懇切丁寧なご指導を賜りました故安部順子先生、黒川雅幸先生、松尾剛先生に心より感謝し、御礼申し上げます。